

僕が障がい者として伝えたいこと

中三

僕は筋ジストロフイー（以下、筋ジス）という筋力がだんだんと低下していく病気にかかっています。筋ジスにはさまざまな型があります。僕はデュシエンヌ型です。僕は小三ぐらいまでは少し運動神経が悪い程度で、そこまで周りの友達と違ひはありませんでした。しかし、小六になつて周りの子たちができていることが、段々とできなくなつてきました。例えば、走ることができなくなつてきました。階段を上るのも、大変になつてきました。病気の進行する速さは、人によつて違います。僕はこの症状の症例から比べると、遅いほうです。中学生に上がるころには大半の人が歩けなくなることが多いですが、僕は中三の今でも、楽ではないですが歩けてはいます。家の中では、大体歩いて移動しています。学校では、中一のときは歩いてトイレに行つたが、今は車いすでなければかなり困難です。この二年間で、歩く力がだいぶなくなつてしましました。

車いでの移動が増えたことで、不便だと感じたことがあります。例えば、駅やテーマパークなどの施設に、エレベーターやスロープなどがないことがあります。駐車場には車いす用の駐車スペースはあります。ほとんどは横幅だけ広い作りになります。車の後ろのドアを開けて、スロープなどを出してから車に乗り込む人もいるのに、後ろが広くないのです。ましてや、狭い駐車場に車いすマークがついているだけもあります。設置をお願いしている人は、できるだけお店に近いところに車いすスペースを設置していると思いますが、移動はわずか數十メートルなので、遠くても広いスペースに設置してほしいです。車いすの人ことを、もつと考えてほしいと思いました。

設備面だけでなく、車いすを使っていて、気付いたことが三つあります。

一つ目は、車いすのイラストです。アニメなどで車いすに乗っているキャラクターは、腰にベルトが付いていなかつたり、病院用の車いすを使つていています。車いすを普段使いしていれば、基本的にはその人に合わせて作るはずなのに、と思いました。

二つ目は、周りからの車いす使用者への見方です。街を歩いていると、いろいろな人の視線を感じことがあります。例えば、ショッピングモールでエレベーターに乗ったとき、小さい子が「この人、骨折しているの？」

と言っていました。僕は心の中で、「骨折している人しか乗らないわけじやないよ」と思いました。

三つ目は、車いすの人への配慮です。それほど狭くない道を歩いているときに、大きさに道を開けられことがあります。僕はそのときに、「別にそんなに開けなくても通れるのに……。」と思いました。特別扱いをされたように感じて、悲しかったです。このことをお母さんに伝えると、「道を開けてくれたのはきっと、その人の優しさだよ。」

と言つてくれました。それを聞いて僕は気付きました。道を開けてくれた人は、僕が嫌でどいたわけではなく、善意でどいてくれたのだと。

こうして考えると、他の二つのことも同じだったのかもしれないと思いました。キャラクターを作っている人は、車いすはすべて同じ形状だと思つていて、小さい子は、「車いす＝骨折してい

る人」だと思つていただけなのかもしれません。そう考えると、「まだ小さい子なので知識もありませんなく、しようがないな。」と思えました。この経験から、「相手のことを探く知ることで、相手の気持ちがより分かるようになる。」ということに気付きました。

僕は車いす使用者として、車いす使用者を特別な目で見るのではなく、普通の人として考えてほしいです。僕が「小さい子だからしようがない」と言つたのは、その子のことを特別扱いしているのではなく、まだ小さいから車いすのことを知らなかつたからです。それと一緒に車いすが通つたときに大きく道を開ける人も、僕に對して特別扱いをしているのではなく、車いす使用者のことをまだ知らないだけなのだと思います。

すべての人が、車いすに限らず障害について、もつと深くお互いに分かり合つていければ、車いすの人はもつと暮らしやすくなると思いました。僕は、すべての障がい者が暮らしやすい社会になることを、強く望んでいます。